

京セラ株主総会宣伝行動行なわれる 伏見大手筋商店街モモタロー宣伝行動も



6月26日午前9時から、京セラ株主総会抗議宣伝行動と稲盛和夫名誉会長への申し入れ・要請行動が京都市伏見区の京セラ本社前で行なわれました。

これはJALの不当解雇撤回を求めて、乗員・客乗原告団と「日本航空の不当解雇撤回をめざす京都共闘会議」（JAL闘争京都共闘）が共催した行動です。雨天の中、支援労組や「JAL闘争を支える京都の会」の会員が結集し、株主は「京セラ創業者の稲盛氏は

『利益なくして安全なし』と言って、ジェット燃料費20万円節約のため台風の雲の中にJALの飛行機を突入させることまでして、いつ大事故が起こるかわからない。『京セラはもうJALとは関係ない』と言っているが、一方今でも二人の役員を派遣していると京セラの総務の窓口自身が言っている。B787の運行再開強行などで、もし何らかのことが起これば京セラにも無関係ではない」という京都の支援労組の



訴えに耳を傾け、ビラに熱心に目を通していました。

乗員原告・山口宏弥団長と客乗原告・内田妙子団長からの力強い挨拶・決意表明のあとJAL闘争京都共闘の佐々木眞成京都総評副議長が代表となって交渉団を編成し、稲盛和夫本人への面会を求めて株主総会会場前である京セラ本社前で三十分近い押し問答となりました。





行人もいました。

そして京セラ株主総会の終了のころあいを見計らい、伏見桃山城手前の稲盛和夫宅を両原告団長ら三人の原告が訪問しました。稲盛夫人が快く玄関を開け対応し、要請書を受け取り、見送りにも出て来られました。JAL本社や京セラ株主総会でさえ一度も原告本人と交渉に応じない稲盛氏への要請書が、初めて確実に本人に手渡ることとなり、原告団には確実な一歩を確信できた京都行動となりました。

この行動に先立ち、25日夜にはJAL闘争京都共闘の第三回総会が開かれ、今秋の高裁闘争山場には「京都賞受賞式」の大抗議宣伝行動はもとより、「稲盛イズムを問う」シンポジウム（仮称）の開催など全国的規模の結集でJAL経営を攻めていく方針を決定。京セラ・稲盛地元伏見区に所在する龍谷大学・脇田滋教授の代表世話人続投など新役員を選出しました。

不当解雇から二年半経過しているのに、稲盛氏の誠意は全く見られず両原告団長が東京から来ているのに、「一瞬も出られない」との失礼な返答でした。

その後、京セラ本社からほど近い、稲盛氏の地元の伏見大手筋商店街を山口団長のハンドマイクを先頭にモモタロー支援部隊が繰り出し、道行く買い物客にビラを配布してJAL不当解雇撤回を訴えました。訴えに熱心に耳を傾ける地元の市民も多く、激励の声をかけてくれる通



再上場のウラで職場は悲痛の声！

JALは昨年再上場をし、その後も利益を上げ続けています。順調な再建を果たしている一方で、5つの争議を抱えたままです。

また、客室乗務員の職場では、解雇後約1000名が採用され、新人多数で仕事が回らなくなっています。解雇された84名はそのままです。

JALの社員は皆、本当に安全で良いサービスを提供できる職場にしたいと願っています。

